

日本語上級文法eラーニングコンテンツの開発 ——ブレンディッドラーニングモデルの構築に向けて——

別府大学文学部国際言語・文化学科 兼 日本語教育研究センター准教授 篠崎 大司

研究成果要約

1. 研究活動の概要

ブレンディッドラーニング（以下、BL）とは、eラーニングによるオンライン教育と従来の対面式によるオフライン教育を融合した授業スタイルで、日本語教育の分野においてもBLに対する関心が高まってきている。しかしながら、授業のメインコンテンツとして一括管理できる学習管理システムを有したコースウェアの開発にはまだ至っていないのが現状である。近年になってeラーニングコースの教育効果の検証や本研究のベースとなる Moodle を日本語教育に導入する試みもなされているが、まだ十分活用されている状況ではない。

そこで、本研究では、以下の3点を目的とした。

- (1) BL導入の観点から従来の授業スタイルを整理分類する。
- (2) (1)で提示した授業スタイルのうち、特にインプット系に特化した統合型BLモデルを構築する。
- (3) 国内外の日本語学習者に質量ともに十分な上級文法学習の機会を提供すべく、インプット系に特化した統合型BLモデルに基づいたeラーニングコンテンツを開発する。

2. 研究成果の概要

2.1. 授業スタイルの分類

教育現場へのBLの具体的な導入の方途を探るべく、日本語の授業スタイルをインプット系、アウトプット系、インタラクティブ系に分類した（図1参照）。

	インプット系	アウトプット系	インタラクティブ系
特徴	1) 正解がすでにある。 2) 言語知識・受容技能の習得が主。 3) 暗記・反復練習で習得。 4) 言語形式の正確さが重視されやすい。 5) 答えや結果が重要。	1) 正解は必ずしもない。 2) 言語運用能力の習得が主。 3) 教師とのインタラクティブを通じて習得。 4) 言語の形式・内容がともに重視される。 5) 答えより過程が重要。	1) 正解は必ずしもない。 2) 知の創造や相互理解が主。 3) 学習者同士のインタラクティブを通じて習得。 4) 言語内容の豊かさが重視されやすい。 5) 答えより過程が重要。

図1 日本語教育の授業スタイルの分類と主な特徴

2.2. インプット系に特化した統合型BLモデルの構築

統合型BLモデル（IBLモデル）とは、eラーニングと対面式授業を一授業の中で融合したモデルである。このモデルは、学習活動の多くをeラーニングに当て、教師は学習状況の管理と個別指導・支援に専念できるため、教育の効果・効率・魅力の向上を目指しつつ、同時に教師の授業負担を軽減できる点に特徴がある。また、教育現場にも受け入れやすいモデルである（図2参照）。

2.3. eコンテンツ「上級日本語文法」の改良

筆者がこれまで篠崎（2011a）（2011b）（2011c）を通じて開発してきた上級日本語文法eラーニングコンテンツの問題点を洗い出し、その改良版を構築した。

具体的には、メインコンテンツの問題の差し替えとそれに伴う付属テキストの改訂および解説動画コンテンツの構築である（図3参照）。

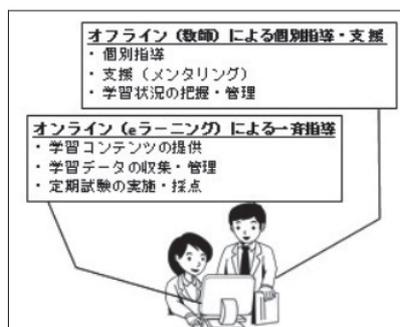


図2 インプット系に特化した統合型BLモデル



図3 日本語能力試験N1問題解説動画画面

3. 成果活用について

開発したコンテンツの一般提供を2013年4月より開始した。今後はこのコンテンツを国内外の日本語教育機関や個々の日本語学習者に広く提供していく。

コンテンツ紹介サイト：篠研の上級日本語『文法』『聴解』

<http://www.sinoken-nihongo.com/>

4. 今後の研究課題

今後はさらなるコンテンツ開発を進めながら、教育の質的向上に寄与していきたい。

研究成果報告

1. はじめに

本研究は、日本語教育の現場に対応したブレンディッドラーニング（以下、BL）モデルを構築するとともに、BLモデルに基づいたeラーニングコンテンツを開発し、それを広く提供することによって、学習環境の改善と教育の質的向上を目指すものである。

BLとは、eラーニングによるオンライン教育と従来の対面式によるオフライン教育を融合した授業スタイルで、両者の長所を生かしつつ短所を補完する新たな授業スタイルとして注目されている。

近年、日本語教育の分野においては、eラーニングあるいはBLに対する関心が高まってきている。

しかしながら、授業のメインコンテンツとして履修管理から到達度評価までを一括管理できる学習管理システムを有したコースウェアの開発にはまだ至っていないのが現状である。近年になってeラーニングコースの教育効果の検証や本研究のベースとなるMoodle（学習管理システム。Course Management System: CMS）を日本語教育に導入する試みもなされているが、まだ十分活用されている状況ではなく、今後の進展が期待される。

2. 先行研究

2.1. BLが学習に与える効果

BLは、学習にどのような効果をもたらすのだろうか。宮地他（2009）はBLが学習に与える効果として以下の4点をあげている。

- (1) 学習者の孤立を防ぎ、落ちこぼれを食い止められる。
- (2) 学習意欲を高める。
- (3) 学習効果を高める。
- (4) 効果的な学習の分業が期待できる。(pp. 96-99)

(1)は、例えばネットを活用した自宅学習のようなオンラインのみによる学習（オンラインオンリー）と異なり、集合学習を組み込むことで仲間と共に学んだり、教師から直接学習上のアドバイス等を受けたりすることができ、学習上の孤立感を防ぐことができる。このことは、教師に学習者の状況をいち早く把握し、より迅速かつ的確に対応することを可能にさせ、結果、従来のオンラインオンリーの問題点であった高いドロップアウト率を抑制することにつながる。(2)(3)の効果は、eラーニングを導入することによって従来の対面式授業では困難であったすべての学習者に対する均質な学習機会と即時的フィードバックの提供が可能となることと、オンラインの特長を生かしネット上のデジタルリソースを授業に組み込むことによって、メディアリッチな学習環境を実現することができることによって得られる。(4)については、例えば新たな知識の獲得や暗記学習はeラーニングで、協働学習や体験型学習など手続き的知識の獲得や創造性の発揮が求められる学習は対面式授業で行うといった分業化によって、教育の質の向上と教師の授業負担の軽減を両立することができる。

2.2. BLモデルに関するもの

BLに適した学習活動について、大木（2005）、宮地（2009）は、Display活動とReferential活動という分類を行っている。Display活動とは、教師が学習者の答えや学習結果を予測することができるような活動で、客観テストを用いて正誤の評価を容易に下せる、反復練習や暗記で習得するといった特徴を持つことから、eラーニングに向けた学習活動である。一方、Referential活動とは、教師が答えを予測することができないような活動で、正解は必ずしもない、対教師や学習者間のインタラクションが中心であるといった特徴を持つことから、集合学習に向けた学習活動である。両活動の違いを宮地（2009）は、図1のように示している。

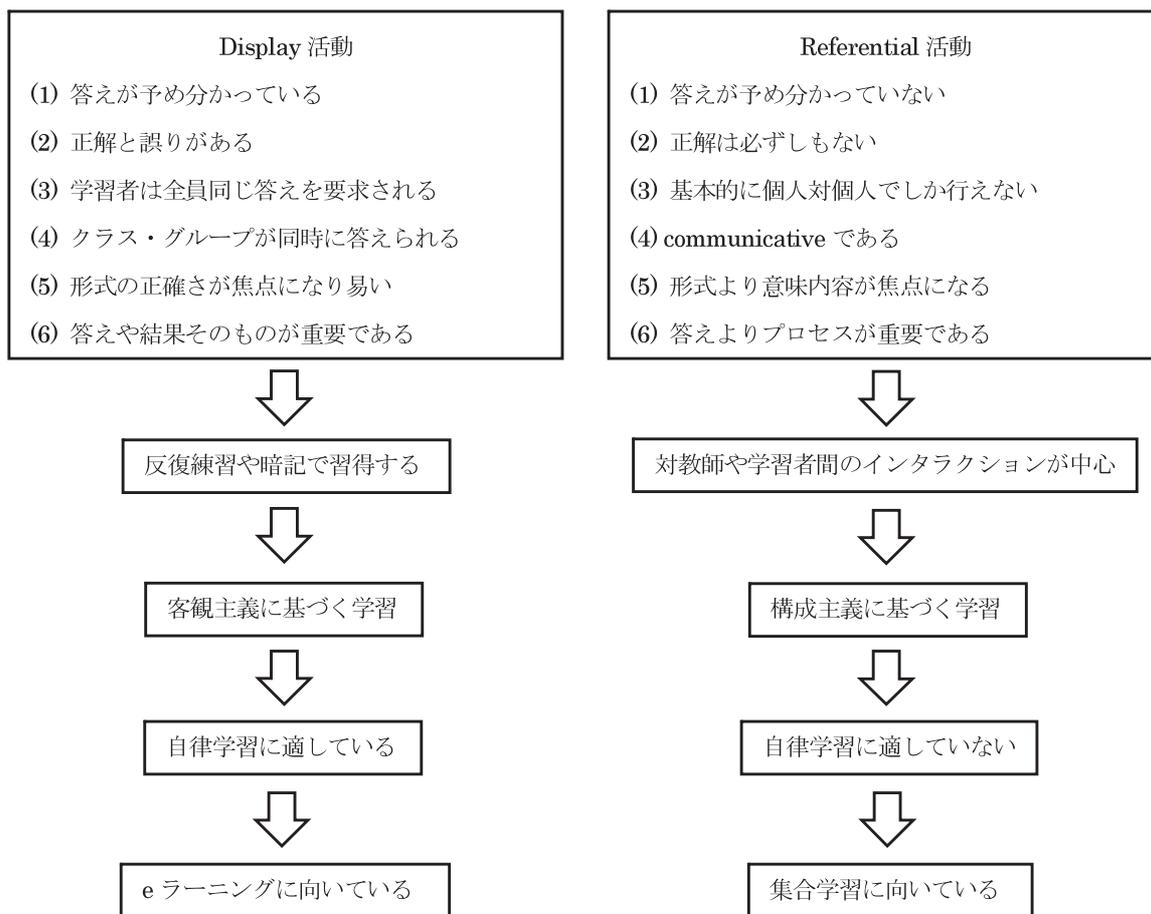


図1 ブレンディッドラーニングに適した学習活動（宮地（2009）p. 100）

この分類は、BLにおけるオンライン学習とオフライン学習の役割分担の枠組みを示す点で有益なものである。こうした観点を授業モデルの構築に生かすためには、まず日本語の授業スタイルをBLあるいはインストラクショナルデザインといった観点から整理し直す必要がある。それにより日本語教育におけるBL導入のあり方に一定の方向性を示すことができるからである。なお、先の宮地（2009）では、学習者対教師のインタラクションと学習者間のそれとをReferential活動に一括しているが、この点についてはさらなる検討が必要である。なぜなら、教師による学習支援と学習者同士による協働学習では、学習目的や活動内容、教育効果や学習活動に対する評価方法など、様々な点で異なるからである。

この他、BLモデルの種類としてBersin（2004）は、1. eラーニングによる自己学習、2. イ

ンストラクター主導のプログラムと自己学習のeラーニングとのブレンド、3. ライブeラーニングを中心に他のメディアを付加したブレンド、4. OJT中心のブレンド、5. シミュレーションと学習センター中心のブレンド、という5つのモデルを提示し、それぞれの特徴について論じている (pp. 87-93。表1参照)。

表1 5つのブレンディッドラーニング・モデル (Josh Bersin (2006) p. 86)

モデル	特徴	例
1. eラーニングによる自己学習プラス、ほかのブレンドされたメディアまたはイベント	自己学習コースが中心のプログラム。集合研修は提供されない。学習者はオンラインのコアアンドスポークコースを取り囲む複数のメディアを利用する。	PepBoys社の小売販売トレーニング、ノベルの営業トレーニング、主要代理店の工業製品SAPのトレーニング、インテルの製造技術者トレーニング、Kinko'sの販売トレーニング、Skill-soft/Netg社のカタログコースウェア
2. インストラクター主導プログラムと自己学習eラーニングのブレンド	プログラムはインストラクター主導のイベントと自己学習のeラーニングをブレンドである。eラーニングのアクティビティは事前学習、授業中、授業間の学習に利用される。これは、教室の学習をより効果的にする優れた方法である。	F銀行のコールセンタートレーニング、Royal&Sun保険の保険トレーニング、BTの商品販売トレーニング、Verizon社の新入技術者トレーニング
3. ライブeラーニングへの他メディアの追加	ライブeラーニングイベントまたはオンラインセミナーがトレーニングの基礎を形成する。自己学習、練習、参考文献は周囲のアクティビティとして提供される。	Intuit社のQuickbooksトレーニング、Sabaソフトウェア営業トレーニング、ピープルソフトの商品トレーニング、Grant Thorntonの従業員教育
4. OJT中心	主要な要素は管理者またはインストラクターによるOJTである。技術が複雑で、「示されなければならない」プログラムにおいて主に使用されている。	IBMの多様性トレーニング、米国の海軍幹部社員教育、BTのMコマーストレーニング、Verizon社の現場トレーニング
5. シミュレーションと学習センター	シミュレーションまたは学習センターが利用される。通常、ITとアプリケーションプログラムに利用され、全体の環境をシミュレートすることができる場所で訓練される。	ロッシュ社のSAPトレーニング、Verizon社、シーメンスの財務専門家トレーニング、シスコシステムズのネットワーク認証

(原文のまま引用)

これらのBLモデルは、例に示されている通りすでに一般企業を中心に運用実績があるものであり、本研究が目指しているBLモデルの構築により多くの現実的な示唆を与えるものである。ただし、本研究では大学や日本語学校といった教育機関での利用を念頭に置いており、一般企業とは異なる人的、経済的あるいは設備上の制約がある。従って、そうした条件を加味しながら、教育効果のみならず利便性の高いモデルを構築する必要がある。

2.3. 日本語教育におけるBL研究

日本語教育におけるBL研究の具体的な取り組みとしては、池田 (2010)、安藤 (2011)、池田・深田 (2012)、藤本 (2008) (2009) (2011) (2012)、藤本・武田・長崎 (2011)、篠崎 (2009)

(2010a) (2010b) (2011a) (2011b) (2011c) (2012) (2013) がある。

このうち、藤本 (2008) (2009) (2011) (2012) は日本と台湾・インド間でのweb会議システムを使った初級日本語授業、安藤 (2011) は山梨県内で学ぶブラジル人児童に対する日本語授業であり、ともに遠隔授業の実践報告である。また、池田 (2010) は、同じく初級日本語学習者を対象としたBLによる授業を実践し、その有効性を検証している。さらに、篠崎 (2009) (2010a) (2010b) (2011a) (2011b) (2011c) (2012) (2013) では、上級日本語学習者を対象にBLによる授業を実践し、その有効性を検証している。

以上のように、日本語教育においてもBL研究やそれに伴うコンテンツ開発が近年徐々にではあるが行われるようになってきている。しかしながら、日本語の授業にあったBLモデルの構築やそれに基づいた汎用性の高い学習コンテンツの開発、さらには開発した学習コンテンツの教育効果等については、まだ極めて少数であるというのが現状である。

3. 目的

以上を踏まえ、本研究では、以下の3点を目的とした。

- (1) BL導入の観点から従来の授業スタイルを整理分類する。
- (2) (1)で提示した授業スタイルのうち、特にインプット系に特化した統合型BLモデルを構築する。
- (3) 国内外の日本語学習者に質量ともに十分な上級文法学習の機会を提供すべく、インプット系に特化した統合型BLモデルに基づいたeラーニングコンテンツを開発する。

4. 授業スタイルの分類

本稿では、先の考察を踏まえ、日本語の授業スタイルをインプット系、アウトプット系、インタラクティブ系に分類した。

インプット系の授業とは、言語知識の習得や受容能力（読む・聞く）の育成および日本語能力試験やBJTビジネス日本語能力テストといった客観テスト対策が主な学習活動になるもので、先の宮地 (2009) のDisplay活動をほぼ踏襲するものである。eラーニングとの親和性が最も高い授業スタイルで、学習活動の大半をeラーニングで行えることから、教師は学習者にとって支援者であると同時に、彼らの学習状況をリアルタイムに把握する管理者としての役割も担う点に特徴がある。この場合、評価の主体はあらかじめ設定された客観的な評価基準に委ねられる。

アウトプット系の授業とは、産出能力（書く・話す）の育成および日本留学試験の記述問題といった主観テスト対策が主な学習活動になるもので、先の宮地 (2009) のReferential活動のうち、学習者と教師のインタラクティブを中心とした学習活動を指すものである。eラーニングとの親和性は、先のインプット系に準じるもので、例えば作文の提出や添削をネット上で行うことによって、学習者や学習状況の管理が容易になるだけでなく、指導の過程を記録したデジタルデータを授業改善や学習者のポートフォリオとして利用することも可能である。教師は、作文の添削や会話活動におけるアドバイスなどを通じて学習に寄与することから、支援者であると同時に教授者としての役割も担う点に特徴がある。この場合、評価の主体は概ね教師

の主観的判断に委ねられる。

インタラクティブ系の授業とは、総合力の養成および相互理解学習や問題解決型学習が主な学習活動になるもので、先の宮地（2009）のReferential活動のうち、学習者同士のインタラクションを中心とした学習活動を指すものである。eラーニングとの親和性は3スタイルのうち最も低く、学習者同士の直接的なやりとりや学び合いそのものが学習機会の大半をなす。従って、教師は支援者であると同時に、そうした学びの場をデザインするコーディネーターとしての役割を担う点に大きな特徴がある。この場合、評価の主体は、教師による評価もさることながら学習者自身による自己評価、あるいは学習者同士による他者評価が重視されやすい。

以上をまとめると、表2のようになる。

表2 日本語教育の授業スタイルの分類（篠崎（2013）p. 13。一部修正。）

	インプット系	アウトプット系	インタラクティブ系
特 徴	1) 正解がすでにある。 2) 言語知識・受容技能の習得が主。 3) 暗記・反復練習で習得。 4) 言語形式の正確さが重視されやすい。 5) 答えや結果が重要。	1) 正解は必ずしもない。 2) 言語運用能力の習得が主。 3) 教師とのインタラクションを通じて習得。 4) 言語の形式・内容がともに重視される。 5) 答えより過程が重要。	1) 正解は必ずしもない。 2) 知の創造や相互理解が主。 3) 学習者同士のインタラクションを通じて習得。 4) 言語内容の豊かさが重視されやすい。 5) 答えより過程が重要。
学習内容・形態	知識習得と受容技能の養成 客観テスト対策	産出技能の養成 主観テスト対策	総合力の養成 相互理解・問題解決型学習
評価方法	客観的評価	教師による主観的評価	自己評価/他者評価
主な学習活動	暗記・反復練習	教師による添削・アドバイス	学習者同士のやりとり
BLにおけるオン・オフのブレンド具合	オンライン教育		オフライン教育
BLでの教師の役割	支援者・管理者	支援者・教授者	支援者・コーディネーター

5. インプット系に特化した統合型BLモデルの構築

統合型BLモデル（Integrated Blended Learning Model. 以下、IBLモデル。）¹とは、eラーニングによるオンライン教育と対面式によるオフライン教育を一つの授業に融合した授業モデルで、対面式授業を主とし授業外にeラーニングを行う講義補完型BLや、eラーニングによる通信教育を主とし適宜集合学習を組み込むサイバー型BL等、オンライン教育とオフライン教育を実質的に分離した授業モデルとは異なるものである。このモデルは、学習活動の多くをeラーニングに当て、教師は学習状況の管理と個別指導・支援に専念できるため、教育効果・教育効率・教育的な魅力の向上を実現しつつ、同時に教師の授業負担を軽減できる点に特徴がある。

1 これは、「融合型BLモデル」（篠崎（2013））の名称を変更したものである。

さらに、一教室空間内で完結する授業スタイルをとることによって従来の対面式授業を大きく変更する必要がないことや、学習者がIT端末を持参することで、教育機関はWi-Fiの設置といった最小限の設備投資つまり専用サーバーやPC教室を用意しなくても運用することが可能となる。これらのことから、本モデルは教育現場にも受け入れやすいモデルであると考えられる。インプット系に特化したIBLモデルを図示すると図2のようになる。



図2 インプット系に特化したIBLモデル (篠崎 (2013) p. 13)

6. eコンテンツ「上級日本語文法」の開発

6.1. 旧来のeコンテンツ「上級日本語文法」の問題点と改良点

本研究におけるコンテンツ開発の目的は、筆者がこれまで篠崎 (2011a) (2011b) (2011c) を通じて開発してきた上級日本語文法eコンテンツの問題点を洗い出し、その改良版を構築することである。まず、旧来のコンテンツのうちメインコンテンツの概要は以下の表3のとおりである。

表3 改良前のeコンテンツ「上級日本語文法」の概要

対 象	日本語能力試験N2級程度の日本語学習者
目 標	日本語能力試験N1程度の文法力の養成
授 業	PC教室による一斉授業。1コマ90分×15コマ (うち、2コマは中間試験と期末試験)。
シラバス	平成13年 (一部) から平成19年までの日本語能力試験1・2級の過去問題にオリジナルコンテンツを追加構成。
課 構 成	①前回の復習 (15問)、②2級過去問題 (15～20問)、③1級過去問題 (15～20問)、④1級問題解説動画 (各課1本。平均約38分)、⑤1級 (N1) 重要文型問題 (8～9問)、⑥文の組み立て問題 (5問)、⑦文章の文法問題 (1題)、⑧新傾向文法問題 (10問)、⑨復習問題 (15問)
備 考	前のタスクが一定の条件のもとで終了しないと次のタスクに進めないように制限した単線型コンテンツ。なお、付属のテキストがあり、学習者はテキストと併用して学習を進める。

従来の問題点は以下のとおりである。

- (1) メインコンテンツに旧試験時の日本語能力試験1・2級の過去問を使用していたため、著作権の関係上、問題の自由な改変や改良ができない。

- (2) 2010年以降から実施されている新しい日本語能力試験に必ずしも対応していない。
- (3) 1級解説動画が1本あたり平均38分で既定の時間まで連続視聴しないと次のコンテンツに進めないようにしていたため、授業中に終了できなかった場合、場所を変えて最初から改めて視聴しなければならない場合が起こる。
- (4) これまで1級問題解説動画は別府大学専用サーバーから提供していたため、解説動画コンテンツのみ学外からのアクセスができなかった。そのため、学習者は自宅学習ができなかった。

そこで、本研究では以下の項目について改良を行った。

- (1) 日本語能力試験の過去問題に替わるオリジナル問題を作成し、学習コンテンツとしてコース上に構築する。
- (2) (1)に伴い、付属テキストを作り変えるとともに、コース上に設置している中間・期末試験コンテンツも改めて作り直す。
- (3) 差し替えたオリジナル問題に沿ったN1問題解説動画コンテンツを構築する。その際、各回の動画を2本に分割し、1本あたりの視聴時間を25分から30分程度に抑える。
- (4) それとともに、学外からもアクセスできるよう、学外サーバーを介して提供する仕組みを構築する。

6.2. オリジナル問題の作成とコンテンツ化

まず、N1・N2相当の文型を各195項目選定し、各文型を含んだ例文を作成し問題文とした。その際、N1・N2相当の語彙を例文中に1~3語含むことで、例文の日本語レベルをある程度一定に保つよう配慮した。

さらに、4肢選択用の錯乱肢を作成した。その際、各文型がコース全体を通じて概ね3度錯乱肢として出題されるよう配慮した。これにより、1文型あたり正解・不正解合わせて4度学習者の眼に触れることになる。

以上をエクセルにまとめ、コンテンツ構築の基礎資料とした(図3参照)。

課	問題番号	文型	別文	選択肢1	選択肢2	選択肢3
1	1	~ことか	やっとゴールできた時に飲んだ一杯の水がどんなにおいしかった(ことか)。	ものか	っばい	ことか
	2	~ことになる	そんな不規則な生活を続けていたら、そのうち大変な(こと)になりますよ。	一方だ	という(こと)だ	どころではない
	3	~とともに	このチームは最高だ。これからもこのまばらしい仲間(と)ともに頑張ってい	といっても	もかまわず	をはじめ
	4	~から見ると/から見れば/から見ても/から見	結構した(と)いても、親の目(から見れば)またまた子どものように見えるの(か)	にかわって	といえば	にねいて
	5	~たび/たびに	学生のころは、失恋する(たび)に近くの海まで行って自分をなくさ(た)もの(次第)	ものなら	際に	
	6	~上は	オリンピック選手に選ばれた(上)は、国の代表として世界一を目指(す)つもり(末)	おかげで	ことには	
	7	~としても(仮定)	最近(は)忙しいので、たとえ旅行(に)行く(としても)、日帰り旅行(くらい)しかでき(ない)	行ってから(でない)	行く(こと)は	行く(から)には
	8	~といかないから/ので	雪の日は滑(って)けが(をする)とい(かない)ので、靴(を)つけて歩いて(きたい)。	したが(と)思う(と)	する(べき)ではなく	する(もの)だから
	9	~さえ~ば	あなたは私(にとって)心(を変)えた。あなた(さえ)い(れば)、他(には)何も(いら)ないの(ほど)	きり	とか	
	10	~くらい/くらい/くらいだ/くらいだ	きのうのパーティーでは、これ(以上)秋(め)ない(くらい)お酒(を)飲(んだ)。	ように	わりに	っこない
1	~など/など/など	「悪い(は)見る(と)い(わ)い(こと)がある。」「(これ)は(選)後(の)か(選)は(選)い(わ)い(と)	からして	はな(と)おま	こそ	

図3 日本語能力試験N2問題例文リスト(抜粋)

さらに、N2問題については、学習者がコース上で学習する際、どの選択肢を選んでもその選択肢の文型に関する解説フィードバックが出るような仕組みにするため²⁾、195項目のN2文型すべてについての解説原稿を作成し、エクセルにまとめ、コンテンツ構築の基礎資料とした(図4参照)。

2) N1問題は、正解してもしなくてもフィードバックはなく、直ちに次の問題が表示され、全問解答した時点で正答数が表示される仕組みになっている。N1問題の正解や解説は、次のコンテンツである動画解説で行う。

日能試N2文型解説リスト			
no.	機能語・敬語	出題基準リスト掲載有無	解説
1	～あげく／～あげくに	○	「～あげく／～あげくに」 【例文】 さんさんけんかしたあげく、二人は離婚することになった。 【構文】 Nの／Vタ形 + あげく／あげくに 【意味】 いろいろと～した結果、～という残念な結果になった。
2	～あまり	○	「～あまり」 【例文】 息子の将来を心配しすぎたあまり、彼の母親は体調を崩してしまった。 【構文】 Nの／V辞書形・タ形+あまり 【意味】 ～という極端な状況になった結果、～という悪いことが起こった。
3	～以上／～以上は	○	「～以上(は)」 【例文】 一人で日本に来た以上は、すべて自分の力でやっつけていかなければならない。 【構文】 V普通形+以上(は) 【意味】 ～という状況なのだから、当然(必ず)～

図4 日本語能力試験N2文型解説リスト(抜粋)

以上の基礎資料を基に、Moodle上に構築した「上級日本語文法」に学習コンテンツとしてN1・N2問題を追加した。図5は、正解の選択肢を選んだ場合のフィードバック画面である。

第1回 N2レベル問題 ?

次の文の()に入れるのに最もよいものを、1・2・3・4から一つ選びなさい。

やっとゴールできた時に飲んだ一杯の水がどんなにおいしかった()。

あなたの答え: ことか

正解です。

「～ことか」

【例文】「君なら、絶対できるよ」という友人の励ましが、どれだけ私の心を救ったことか。

【構文】疑問詞 + イadj/ナadjな/V普通形 + ことか

【意味】把握できないくらいはなはだしく～だ

図5 日本語能力試験N2レベル問題 正解フィードバック画面

これに伴い、付属テキストの該当部分をオリジナル問題に差し替えた。また、従来の付属テキストには掲載されていなかった1級(N1)重要文型問題、文の組み立て問題、文章の文法問題、新傾向文法問題もテキストに追加掲載した。さらに、付属テキストと同様、中間・期末試験問題も新たなものに作り直した。

6.3. 解説動画コンテンツの構築

各回のN1問題を前半と後半に分け、それぞれについての解説講義をデジタルビデオで計26本撮影した。撮影した動画データを適宜編集した後、動画サイトであるYoutubeにアップし、コース各回の該当箇所にリンクした(図6参照)。

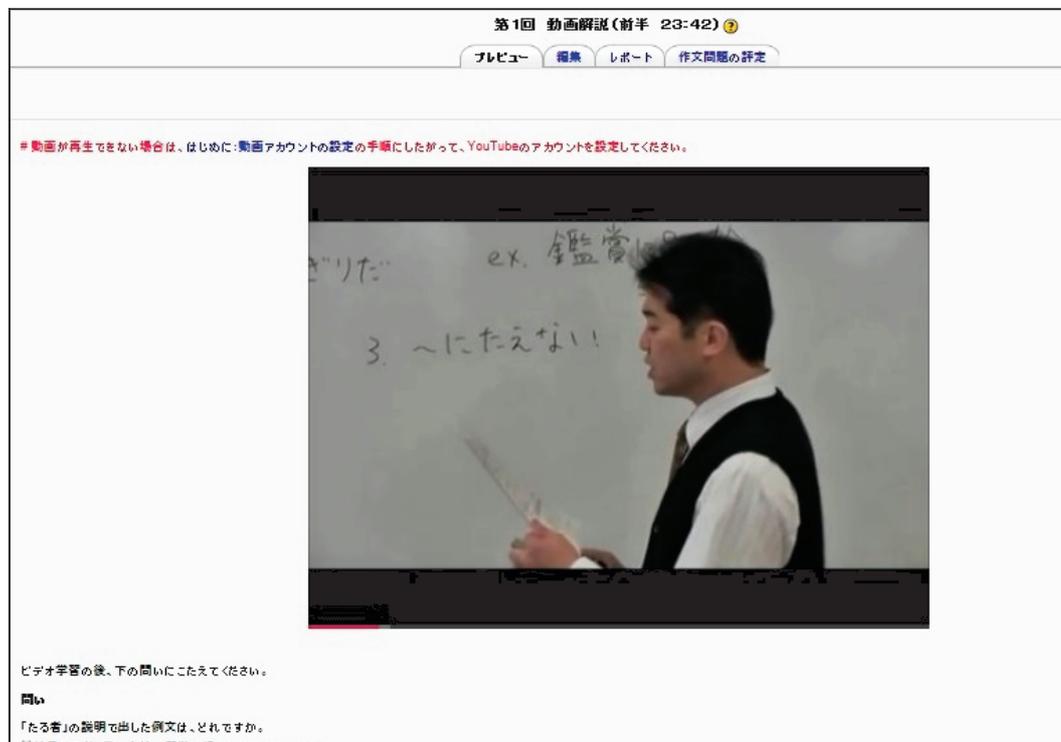


図6 日本語能力試験N1問題解説動画画面

この動画コンテンツは、指定されたIDとパスワードでログインしないと視聴できない仕組みになっており、コースに登録した学習者は学習開始直後に、まずコース上に表示されたIDとパスワードでYoutubeにログインする³。これにより、登録された学習者のみ場所や時間に制限されることなく自由に解説動画にアクセスすることが可能となる。

7. 検証授業の実施とコンテンツの実用化

7.1. 検証授業の実施

構築したコンテンツの設定状況等を検証するため、下記要領で検証授業を実施した(図7参照)。

実施期間：2013年3月5日から2013年3月25日まで(全15回)。

実施場所：別府大学内PC教室。

協力者：別府大学に在籍する中国人留学生2名(なお、2名ともすでに日本語能力試験N1に合格している)。

³ なお、このログイン状態は、ログアウトをしない限りコース終了時まで維持される。ただし、他のPCで学習する場合は、再度ログインの作業が必要である。

検証方法：筆者立ち合いの下、協力者が所定の手順に従って学習を進めた。設定等に不具合が見つかった場合は、筆者が直ちに修正した（図7参照）。

検証授業の結果、学習に支障をきたすような特段の問題は見られなかった。協力者2名からも特に問題点は指摘されず、当初懸念していた解説動画コンテンツの解説のスピードや説明の分かりやすさについても、「聞き取りやすい。」「分かりやすい。」という評価を受けた。



図7 検証授業の様子

7.2. コンテンツの実用化

以上の検証作業を踏まえ、コンテンツの名称を「篠研の上級日本語『文法』『聴解』」とし、2013年4月1日より一般提供を開始した。コンテンツはレンタルサーバーから提供される。教育機関など団体で利用する場合、1コースあたりの受講者数は8名から30名までである。コンテンツの概要紹介および受講受け付けは、下記サイトで行っている。

篠研の上級日本語『文法』『聴解』：<http://www.sinoken-nihongo.com/>

8. おわりに

これまで日本語教育では、学習者中心主義の重要性や教師主導型の授業スタイルに対する限界等が指摘されていながら、実際の教育現場では学習活動のタイプに関係なく、ほぼ一律に教師主導型の対面式授業が行われてきた。とりわけ国内の教育機関で行われている直接法による対面式授業では、教師1名で対応できる学習者数は20名が限界であり⁴、教育効果のみならず費用対効果の面においても問題があったといえる。

しかしながら、日本語の授業スタイルをインプット系、アウトプット系、インタラクティブ系に分類し、それぞれの特性に応じて適宜ICT技術やeラーニングシステムを取り入れることによって、学びの在り方や可能性が格段に広がり、より効果的、効率的、魅力的、経済的かつメディアリッチな学習環境を実現することができる。

今後は、開発したコンテンツを広く一般提供すると同時に、さらなるコンテンツ開発を進めながら、教育の質的向上に寄与していきたいと考える。

謝辞

コンテンツ構築にご協力いただいた太田由紀子氏、大坪美奈子氏、工藤美佳氏、室円氏に感謝する。

4 例えば、「日本語教育機関の運営に関する基準」では、以下のような条項が設けられている。
(同時に授業を行う生徒数)

6 日本語教育機関において、日本語の一の授業科目について同時に授業を行う生徒数は、20人以下とするものとする。

(日本語教育振興協会ホームページより)

参考文献

- 安藤淑子 (2011) 「ブラジル人学校と大学を結んだ遠隔日本語教育:初級学習者に対するブレンディッドラーニングの試み」『山梨国際研究:山梨県立大学国際政策学部紀要』6 pp. 51-60
- 池田伸子 (2010) 「ブレンディッドラーニング環境におけるeラーニングシステム利用の効果に関する研究」『ことば・文化・コミュニケーション』2 pp. 1-12
- 池田順子・深田淳 (2012) 「Speak Everywhereを統合したスピーキング重視のコース設計と実践」日本語教育学会『日本語教育』152号 pp. 46-60
- 大木充 (2005) 「自律学習と自律学習型CALL」『京都大学平成8年度教育特別経費報告書』No. 8 pp. 27-32
- 国際交流基金・日本国際教育支援協会 (2007) 『日本語能力試験 出題基準 改訂版』凡人社
- 篠崎大司 (2013) 「インプット系授業に特化した融合型ブレンディッドラーニングモデルの構築と上級日本語文法eラーニングコンテンツの開発」日本語教育方法研究会『日本語教育方法研究会会誌』Vol. 20 No. 1 pp. 12-13
- 篠崎大司 (2012) 「新しい日本語能力試験に対応した上級日本語聴解eラーニングコンテンツの開発—ブレンディッドラーニングモデルの構築に向けて—」日本語教育方法研究会『日本語教育方法研究会会誌』Vol. 19 No. 2 pp. 52-53
- 篠崎大司 (2011a) 「Moodleを活用したブレンディッドラーニング授業モデルの構築とその有効性—上級日本語文法BLモデルの再改良と教育効果—」日本語教育方法研究会『日本語教育方法研究会会誌』Vol. 18 No. 2 pp. 8-9
- 篠崎大司 (2011b) 「Moodleを活用したブレンディッドラーニング授業モデルの構築とその有効性—上級日本語文法BLモデルの改良—」日本語教育方法研究会『日本語教育方法研究会会誌』Vol. 18 No. 1 pp. 2-3
- 篠崎大司 (2011c) 「Moodleを活用したブレンディッドラーニング授業モデルの構築とその有効性—上級日本語文法を中心に—」別府大学『別府大学紀要』第52号 pp. 1-10
- 篠崎大司 (2010a) 「Moodleを活用したブレンディッドラーニング授業モデルの構築とその有効性—上級日本語読解BLモデルの改良—」日本語教育方法研究会『日本語教育方法研究会会誌』Vol. 17 No. 2 pp. 22-23
- 篠崎大司 (2010b) 「Moodleを活用した上級日本語聴解eラーニングコンテンツの開発と学習者評価—ブレンディッドラーニングモデルの構築に向けて—」別府大学『別府大学紀要』第51号 pp. 21-34
- 篠崎大司 (2009) 「Moodleを活用した上級日本語読解eラーニングコンテンツの開発と学習者評価—ブレンディッドラーニングモデルの構築に向けて—」別府大学国語国文学会『別府大学国語国文学』第51号
- 中尾茂子・安達一寿・北原俊一・新行内康慈・井口磯夫・綿井雅康・橋本健志 (2005) 「ブレンディッド型授業形態の類型による教材開発と授業実践」『日本教育情報学会年会論文集』21 pp. 260-263
- 藤本かおる (2012) 「web会議システムを使った遠隔対面授業での教室活動についての考察—日本・インド、日本・台湾間の初級日本語ブレンディッド・ラーニングの授業分析から—」『日本語研究』32 pp. 177-190

- 藤本かおる (2011) 「遠隔教育における初級日本語教育でのweb会議システムの利用とその考察：インドとの遠隔対面授業と日本国内の対面授業の比較を中心に」『JeLA会誌』11 pp. 12-17
- 藤本かおる (2009) 「ブレンディッド・ラーニングにおける学習者の教材コンテンツ利用の観察と考察：東京・台北間での初級日本語遠隔授業から」『日本語研究』29号 pp. 37-50
- 藤本かおる (2008) 「ブレンディッド・ラーニングによる遠隔日本語教育の実施と検証：東京・台北間での初級日本語授業から」『日本教育工学会研究報告集』08(1) pp. 21-26
- 藤本かおる・武田聡子・長崎清美 (2011) 「受け入れ現場の要望を反映した日本語作文添削ブレンディッド・ラーニングの構築と実践」『日本教育工学会研究報告集』2 pp. 43-46
- 宮地功・安達一寿・内田実・片瀬拓弥・川場隆・高岡詠子・立田ルミ・成瀬喜則・原島秀人・藤代昇文・藤本義博・山本洋雄・吉田幸二 (2009) 『eラーニングからブレンディッドラーニングへ』共立出版
- 吉田晴代 (2007) 「e-Learningによる教員研修を組み込んだ小学校英語：教員養成のためのカリキュラム開発」大阪教育大学英文学会『大阪教育大学英文学会誌』52巻 pp. 83-98
- Josh Bersin (2004) *The Blended Learning Book: Best Practices, Proven Methodologies, and Lessons Learned*. San Francisco: Pfeiffer. (邦訳 ジョシュ・バーシン (2006) 『ブレンディッドラーニングの戦略』東京電機大学出版局)
- 篠研の上級日本語『文法』『聴解』：<http://www.sinoken-nihongo.com/>
- 日本語教育振興協会「日本語教育機関の運営に関する基準」：
<http://www.nisshinkyō.org/review/pdf/index02.pdf>